

第5章「スーフィズムを取り巻く環境の変化」では、15世紀半ば、オスマン朝がイスタンブルに首都を構えるようになってなお、スーフィーの伝統が首都に進出し、さらにバルカンにまで広まっていくことが指摘される。そうしたなかでベトレッディンなどが新しい宗教運動をおこし、異端問題を起こすまでに至った。加えて15世紀後半からアナトリアで起こったクズルバシュ問題がオスマン朝を揺るがし、スンナ派の盟主としてサファヴィー朝と対峙し、彼らを弾圧していく過程が説明される、さらにウラマーとスーフィーとの間の軋轢についても詳説される。

第6章「タリーカの隆盛と論争」では、ジェルヴェティー教団はじめ17世紀以降のタリーカのさらなる隆盛が説明される。そうしたなかでイブン・アラビーの思想的伝統がいかに重要な役割を果たしていたかが指摘され、さらにその著作の注釈がトルコ語で記されることが広まっていったことが示される。そうしたなかで突如としてタリーカを標的にしたカドゥザーデ派の運動がおこったことが詳説される。

第7章「成熟の時代から近代化改革の時代へ」では、カドゥザーデ派の運動が過ぎ去った18世紀以降の状況が整理される。この時代もタリーカの流入と発展は続き、思想や文芸面においてスーフィズム文化の成熟が見られた。続く19世紀においても新たな教派・教団が起こり、新しい発展の方向性が示さることとなった。しかし同時にスルタン・マフムト2世期に国家による統制と管理が顕著になり、ベクタシー教団が閉鎖されるなどの事態に陥ったことが説明され、さらに20世紀に至ってオスマン朝にかわりトルコ共和国が成立すると、1925年にテツケが閉鎖され、タリーカも公的に閉鎖されるに至った。しかしながらタリーカは完全に消滅したわけではなく、今日もなお姿かたちを変えて存続し、政治的な影響力をもつものさえあることが示されて擱筆される。

以上のような構成で、スーフィズムについて、前半の理論的側面と後半の歴史的側面とによって、すなわち二つの視点からその全体像をひととおり略括している。おそらくは両著者とも承知の上で執筆されているのだろうが、本書だけでスーフィズムのすべてが完全に理解できるものではない。冒頭に示したように、本書は、所収される《イスラームを知る》シリーズの一環として、最新研究に基づき記された概説書であって、両著者の長年の専門研究のエッセンスである。スーフィズムについてのさらなる深い議論は本書に所収される参考文献に示される両著者の著作をはじめ、数多くの著作を参照する必要がある。むしろ従来まで思想研究と歴史研究が乖離していた学問的状况を顧みれば、本書のように両者が協力して、スーフィズムの理論と歴史を結び付けて説明しようとする試みは高く評価されるべきである。

また従前まで、トルコの思想研究はトルコ語という執筆言語の問題もあってイスラーム世界の思想研究のなかであまりきちんと評価されてこなかった傾向がある。本書はそうした状況に一石を投ずるべく、アラビア語・ペルシア語・トルコ語（オスマン語・現代トルコ語）に精通した両著者が、中世から現代にいたるイスラーム世界の中心的存在であったオスマン朝（およびその後継国家であるトルコ共和国）のなかで、イスラーム世界におけるスーフィズムの動向を経括したしたものとして、極めて高い価値を有するものである。

2016年7月15日、失敗に終わったものの、トルコ共和国において世界を震撼させたテロが起こり、その影響は現在も継続している。いまなお経緯はまだ完全に明らかにはなっていないものの、トルコ共和国の現政権（イスラーム主義政党であるAK（公正発展）党政権）はテロの背後にトルコさらには世界で活動するタリーカが存在を指摘している。スーフィズムへの理解は、単に思想研究にとどまらず、歴史・社会・政治を理解する上においても必須である。そのための基本的な視座を提供してくれる本書は極めて有益な入門書となるであろう。

（三沢 伸生 東洋大学社会学部教授）

加賀谷寛著、松村耕光・東長靖・山根聡・今松泰・仁子寿晴編『加賀谷寛著作集』京都大学イスラーム地域研究センター 2013-2015年 全3巻

インド・ムスリム研究を志す者にとって、加賀谷先生のご研究は今なお必読文献である。しかし今日改めて先生のご論文に接しようと思えば、単行本として刊行されていない著作については、古い紀要や学会

誌、報告書などを採さねばならず、すでに入手が難しいものもあった。このたび松村耕光、東長靖、山根聡、今松泰、仁子寿晴の各氏により『加賀谷寛著作集1～3』がまとめられ、こうした困難が解消され、その業績に触れられるようになった。これはまことに幸いなことである。

加賀谷先生がご自身の研究を四つに分け、(1) ウルドゥー語学・文学研究、(2) インド・パキスタンのムスリム近現代思想史研究、(3) イラン現代史研究、(4) イスラム研究、と示されているとおり(2巻385頁)、その内容は幅広い。本著作集は、単行本として刊行されていない著作を中心にテーマで分類し、3分冊に収めている。各巻のテーマは以下のとおりである。

- 1 南アジアとイスラーム——民衆イスラームとスーフィズム、現代のイスラーム
- 2 南アジアの政治と文化——パキスタン、アラブ、アフリカの民族運動とイスラーム
- 3 近現代イランの社会と思想——近現代イラン、書評、報告など

各巻の巻頭にそれぞれの分野を専門とする編者による解説があり、加賀谷先生のご業績の研究史上の位置づけや今日の意義が述べられており、若い読者にとって研究史理解の大きな助けとなる。

加賀谷先生のご業績がいかに先駆的で独創的であったかということは、編者の解説で十分に指摘されているとおりである(1巻v頁、viii頁、2巻ix頁など)。ここでは、筆者が特に感銘を受ける点について、幾つか指摘して、書評に代えることとした。

第一に、加賀谷先生が言語を単なるツールとして扱っておられないということである。地域研究を志す人が、現地理解のために言語を習得することは当然のことになっているが、地域研究者としての加賀谷先生はウルドゥー語、ペルシア語を学ばれ、それをさらに語学・文学研究として深められ、真の意味でことばをつうじてインド・ムスリムやイランの歴史と社会を理解しようとされた。学生の語学教育にも長年携わられ、大阪外国語大学をご退職後には見出し語18,000語、27,500語を収録した『ウルドゥー語辞典』(大学書林、2005年)を出版されている(2巻vi参照)。このような、言語に対する真摯で徹底した姿勢は、地域研究者として対象地域から学ぼうとする誠実さの表れに他ならない。このような研究は、ことばは単なる道具ではなく、それを書き話す人々そのものである、という認識を新たにさせるものである。

次に、加賀谷先生のインド・イスラーム研究は、当時最先端のイスラーム研究として発表されたことが察せられることである。今日、インドのイスラームは、インドで少数派であるとともに、イスラーム世界でも周縁的な存在であることから、二重の周縁性をもっていると指摘されている(1巻vi頁、[小杉2002:191])。しかし『「バングラ・デーシュ」批判ノート』(1971年、2巻、52頁)や、イラン革命についての論文(第3巻)が放つ、清新な力強さはどうだろう。それは日本における南アジア近現代史研究が飛躍的に深化した時代で、加賀谷先生はそれを牽引された一人だった。インド・イスラーム研究は、何故、そしていつから二重の周縁性にとらわれてしまったのだろうか。

さらに、加賀谷先生は今日の一般的な領域概念を超えた広い地域を研究されたということがある。南アジアという地域をイランなど近隣地域と結びつけて、一つの視角の中で捉えるということは、中世以来のインド・ムスリムの歴史を考えれば当然のことであるが、現状はなかなかそのようになってこなかった。今日、一般にパキスタン研究は南アジア研究の一部になっているが、現代イラン研究は中東イスラーム研究の一角にある。またアフガニスタン史はインド・ムスリム史と深くかかわっているが、言語の関係もあってペルシア・イラン研究の領域とみなされてきた。近年、NIHUプログラム「イスラーム地域研究」などによってイスラーム研究が深化したことで、地域を横断した研究や共同研究の成果が増えているが、加賀谷先生ははるか以前からウルドゥー語とペルシア語をつうじてイランからインド亜大陸全般にわたる領域を研究対象としてこられた。一人の研究者の中にインド、西アジア、ユーラシアを含む広がりや深みがあるということである。

加賀谷先生は1958年のご論考で、「パキスタン政府の米英に対する隷属強化、国内の民主運動の抑圧によってイスラーム教徒のパキスタン建国の理想は裏切られた。人民の生活条件が悪化し、役人の腐敗、闇市。物資不足、物価高騰、避難民の野犬同様の生活などどれを取っても暗い問題ばかりがおしかぶさっている。」と指摘されている(1巻、「西アジアの宗教」169頁)。さらに、「言論抑圧と並んで当然偏狭な神秘的・イス

ラムの神秘一致の国粋思想が精神動員され、民衆の政府に対する不満をそらしている」とある。やっと最初の憲法が制定されて2年足らずの時点で、現在ある問題の多くがパキスタン社会にすでにあった。さらにこの後、アフマディーヤ迫害や宗派間の暴力など、宗教的偏狭は1958年当時よりもさらに悪化していく。パキスタンの理想とは、ムスリムが自由に生きることができると同時に、宗教的寛容をそなえた社会を実現することであったとすれば、仮に普通選挙による議会制度や三権分立など民主主義の形式的な要件が安定的に満たされたとしても、パキスタン政治の問題の解決にはならない。パキスタン政治は、未だ果たされないままの建国の理想を追求することを、国民から託されているはずだからである。筆者は今日のパキスタン政治を見る際の問題意識を、改めて厳しく問われている思いがした。

加賀谷寛著作集は、若い研究者から年長の研究者まで、それぞれの立場なりに、多くの示唆を得、また自らを省みて問題意識を新たにする機会を与えてくれるだろう。編者のご尽力に心から敬意を表する次第である。

(井上 あえか 就実大学人文科学部教授)

秋葉淳・橋本伸也編『近代・イスラームの教育社会史——オスマン帝国からの展望』(叢書・比較教育社会史) 昭和堂 2014年 vii+295+xiii 頁

本書は、比較教育社会史研究会によって編まれた『叢書・比較教育社会史』の第二期(展開篇)のなかの一冊である。第一期の『叢書・比較教育社会史』は、2003年から2010年の間に全7巻が刊行され完結し、その後、第二期が編まれた。その第二期において中東・イスラーム地域を対象とする本書が刊行された。

本書は、比較教育学を専門とし、主な研究フィールドをマレー世界のイスラーム社会におく筆者にとって待望の一冊である。19世紀から20世紀における東南アジア地域のイスラームを研究する場合、同時期中東・イスラーム地域の動向を抜きに考えることは到底できない。東南アジアのウラマー(学識者)たちの多くは中東地域から多くの刺激を受け、故郷でそれぞれの改革運動を展開したからである。当時、東南アジア地域で発刊された雑誌やウラマーの著作には「中東」の思想が紹介されている。しかし、「中東」の思想が一体、どのような社会的文脈で生まれたものなのか、また当地の社会状況はいかなるものであったのかをそれらの雑誌から掘り取ることは困難であり、多くの謎はブラックボックスのなかにあった。本書はこれらの疑問に対して多くの貴重な情報を提供してくれている。このことは、他の地域を対象とするイスラーム研究においても同様であろう。

本書はその意味で、中東・イスラーム地域の歴史を専門としない筆者にとって、批判的に読むどころか、勉強させていただくことばかりであった。さいわいにも本書では、各部の冒頭に、イスラーム史やオスマン帝国史に馴染みのない読者のために前提的知識を提供するイントロダクションが設けられており、わかりやすく論点が提示されているため、大変役立った。この他にも、本書は、各章の連関性が明確に読み取れるよう、各執筆者が議論を重ね、お互いが各章を参照するなど、さまざまな工夫と配慮が施されている。大変丁寧に仕上げられた著作である。

本書は3部からなり、序章と終章のほか、9章から構成される。

序章(秋葉 淳)

第I部 イスラームの近代——知の伝統と変革

第1章「伝統教育」の持続と変容——19世紀オスマン帝国におけるマクタブとマドラサ(秋葉 淳)

第2章 スーフィズムの知と実践の変容——エジプトの事例から(高橋 圭)

第II部 19世紀オスマン帝国の改革と展開——変容する知識空間と社会構造

第3章 オスマン帝国の新しい学校(秋葉 淳)

第4章 ジャーナリズムの登場と読者層の形成——オスマン近代の経験から(佐々木紳)

第5章 アルメニア人オスマン官僚の教育的背景(上野雅由樹)

第6章 歴史教科書に見る近代オスマン帝国の自画像(小笠原弘幸)